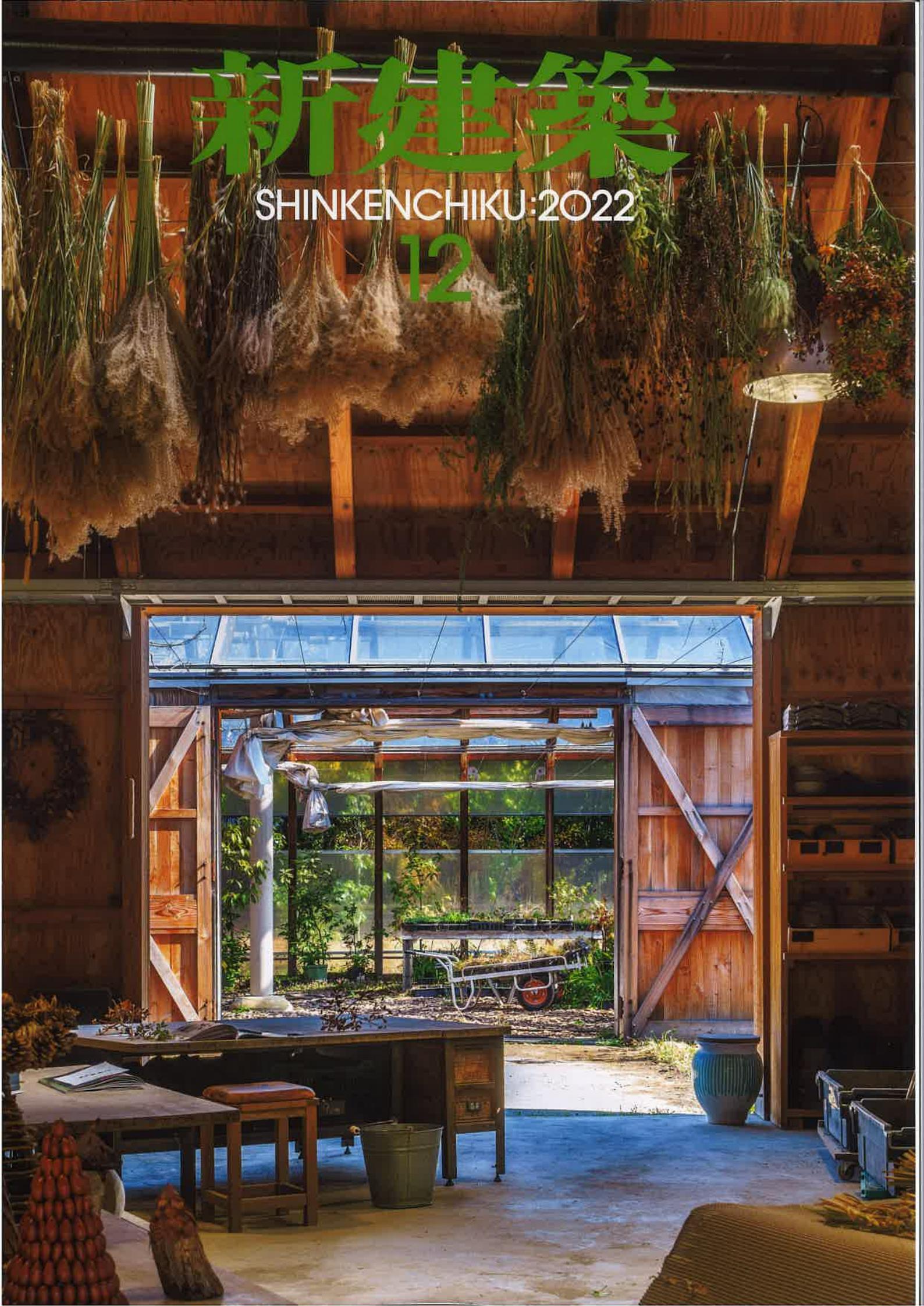


新建築

SHINKENCHIKU:2022

12



枚方市総合文化芸術センター

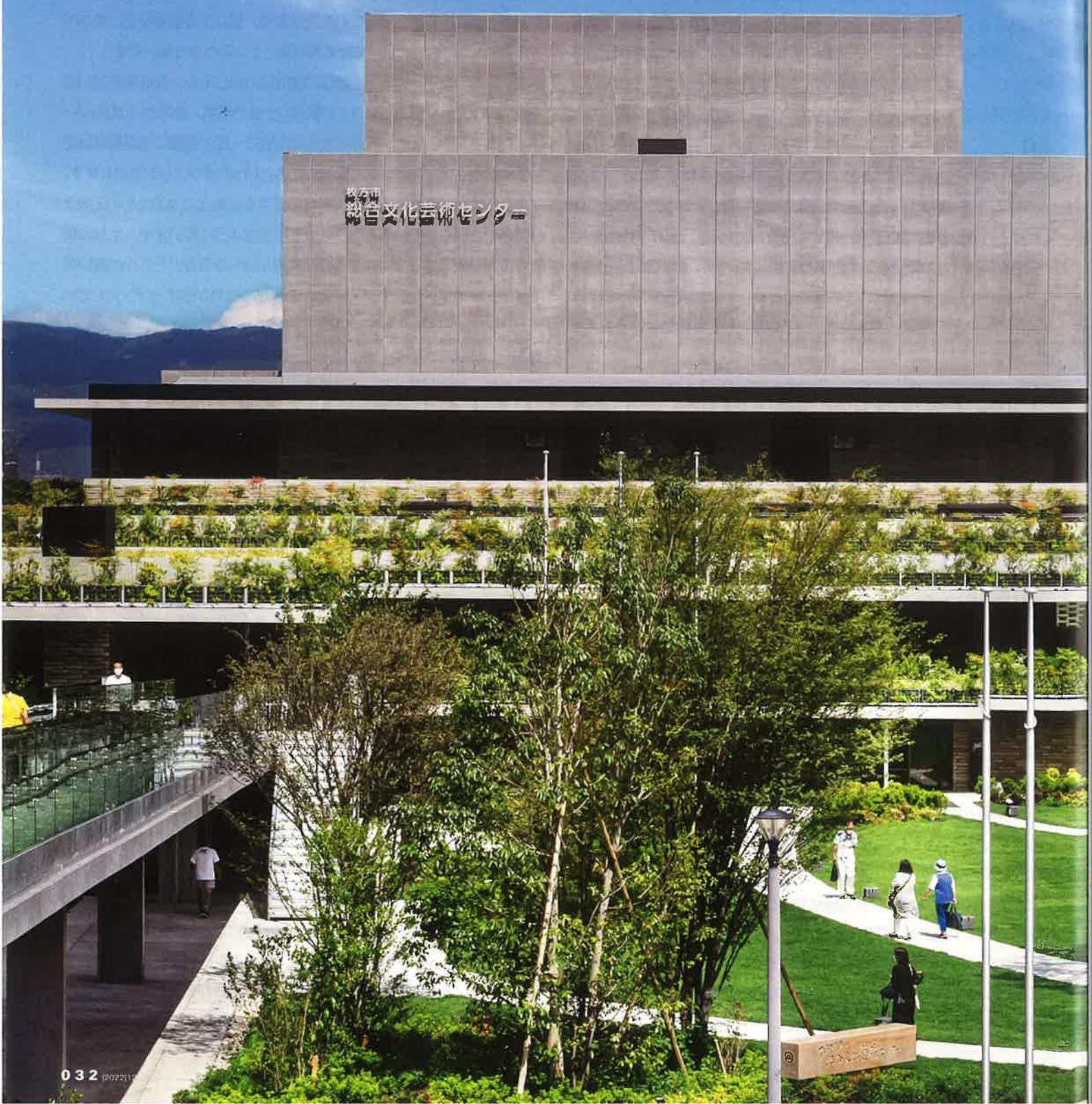
設計 日建設計

施工 前田建設工業

所在地 大阪府枚方市

HIRAKATA PERFORMING & VISUAL ARTS CENTER

architects: NIKKEN SEKKEI





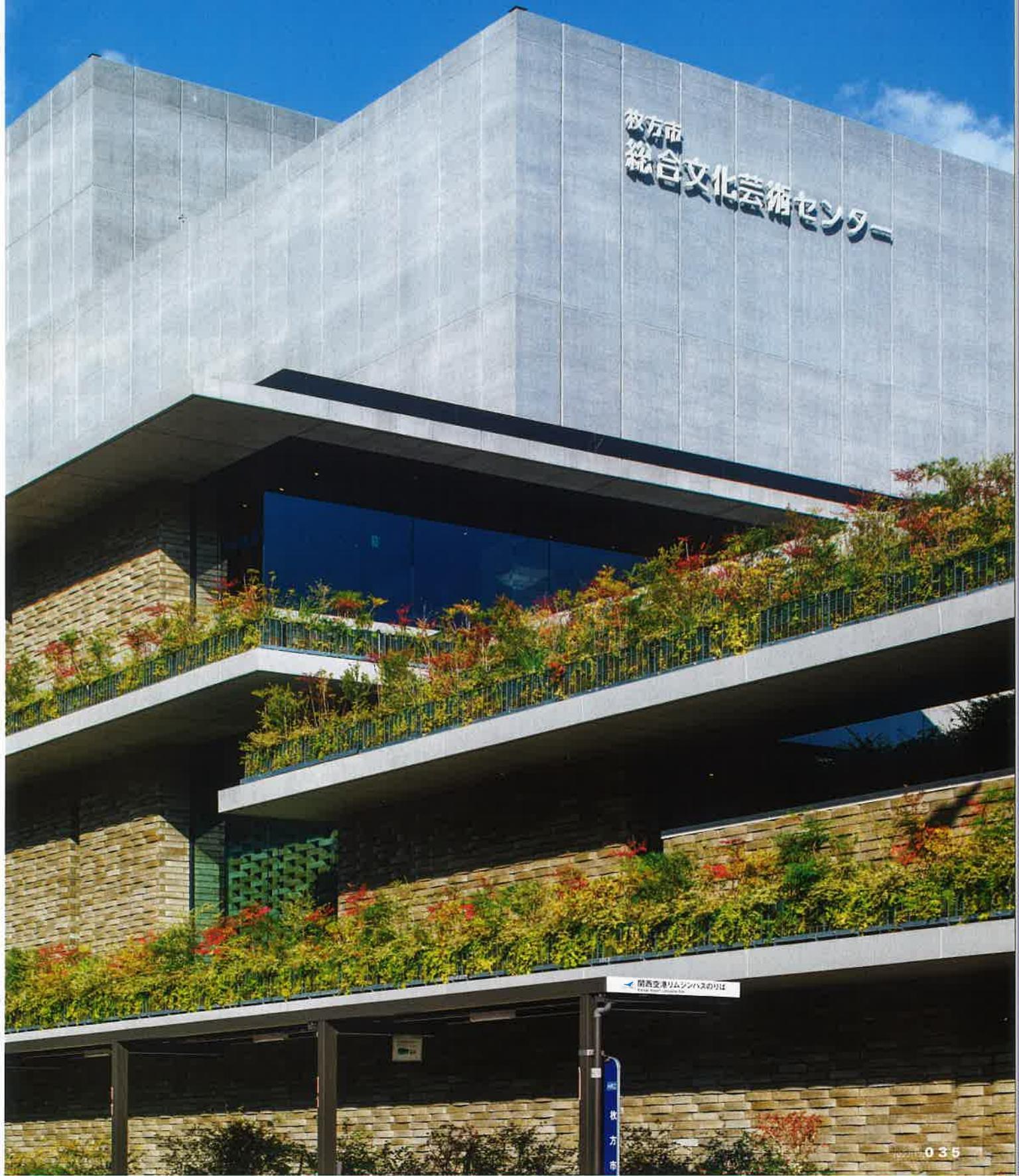
南側外観。敷地は京阪枚方市駅東側の枚方市役所前公園から淀川を結ぶ幹線上に位置し、緑の繋がりを生むことを意図した。敷地面積の30%の綠化を確保している。外構には複数の広場を設け、建物には軒先縁化や中庭を設けた。写真左に既存の歩道橋と2階レベルで繋ぐテッキがかかる。



2012年開業の「横浜市立美術館」
（山口豊設計）

廣場の広場。外部には公演前の待ち時間や、
入館料も市長が憩える空間を点在させている。

低層部内外装は釉薬還元焼成大型煉瓦積み、外壁上部は筋筋コンクリート壁で超高圧ウォータージェット機自引き仕上げ、軒庇はコンクリート打ち放し。



→ 関西空港リムジンバスのりば

JR
枚方市

「文化芸術の場」と「豊かな緑」が織りなす空間
枚方市は京阪電車で大阪・京都へ30分で行ける利便性のいい都市である。枚方の中心である枚方市駅から徒歩5分に位置する枚方市総合文化芸術センターは、3つのホールと美術ギャラリーを持つ枚方市の新たなランドマークとして、多くの市民から永く愛される施設となるために、「文化芸術の場」と「豊かな緑」が織りなす空間を目指した。

屋外には施設前広場として、市民が気軽に集える芝生の広場や、木陰の広場、ステージを設け文化芸術の場となる空間を点在させた。施設内では、中庭や軒先緑化による豊かな緑と自然光あふれる場が、エントランスロビーをはじめとしたさまざま

な活動拠点を繋ぐ計画とした。内外装を煉瓦仕上げで連続させることで、空間の一体性を感じさせると共に、内外一体となった文化芸術活動の展開が期待される。

「コンパクト」なホール

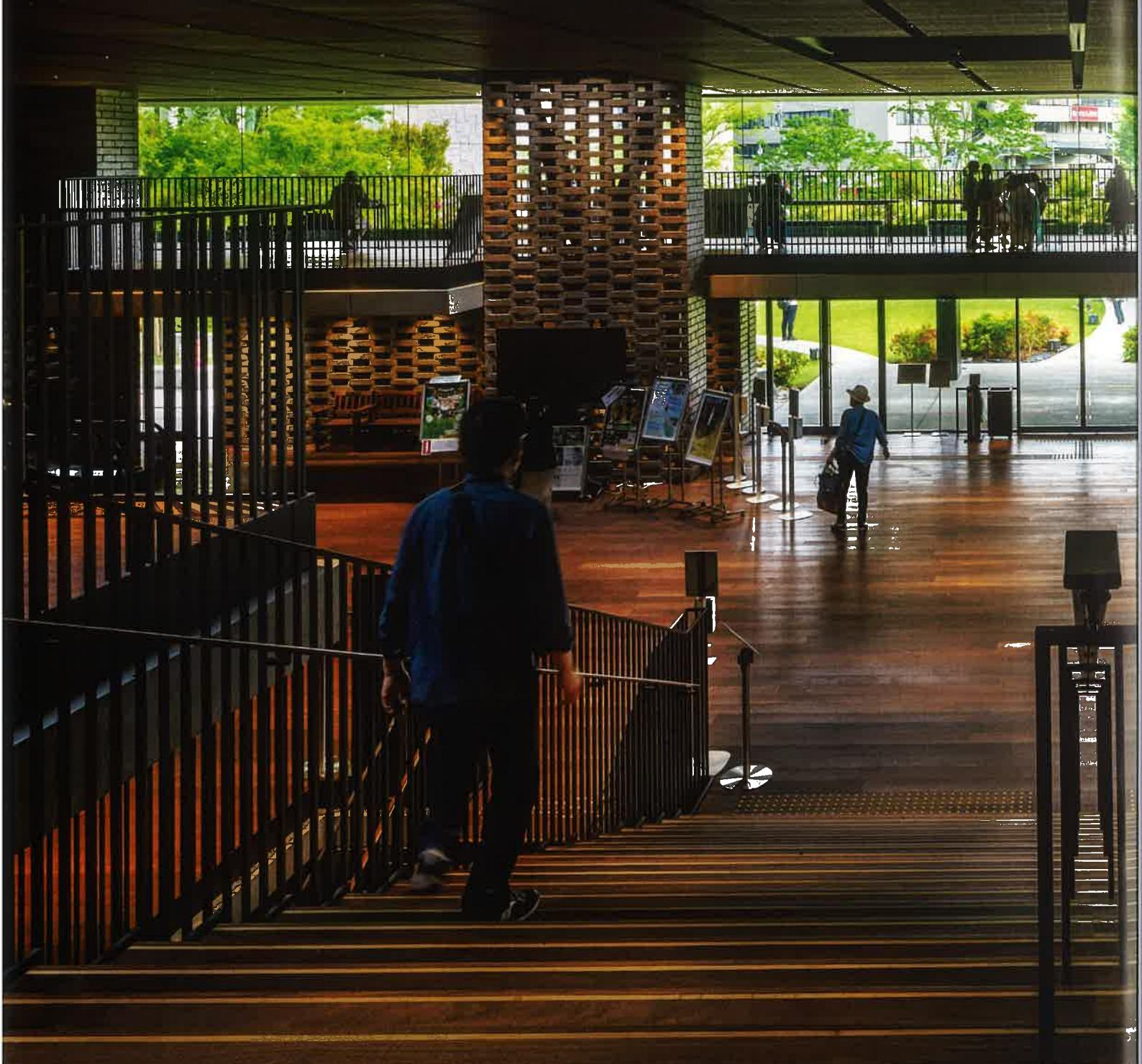
文化芸術拠点にふさわしい上品で洗練された空間でありながら、市民の使いやすいスケールの寸法体系を追求した。階高を抑えたエントランスロビーや各ホールでは、その距離感ゆえの臨場感を楽しめる。高さ方向だけでなく、通路幅や諸室の距離も見通しや親密さを確保する寸法とし、人の活動や豊かな緑が感じられる空間としている。

外観もボリュームを抑え、緑の中にそっと佇むことにより、だれでも利用できる安心感を創出し、施設前広場で多くの方が楽しむことができる設えとした。

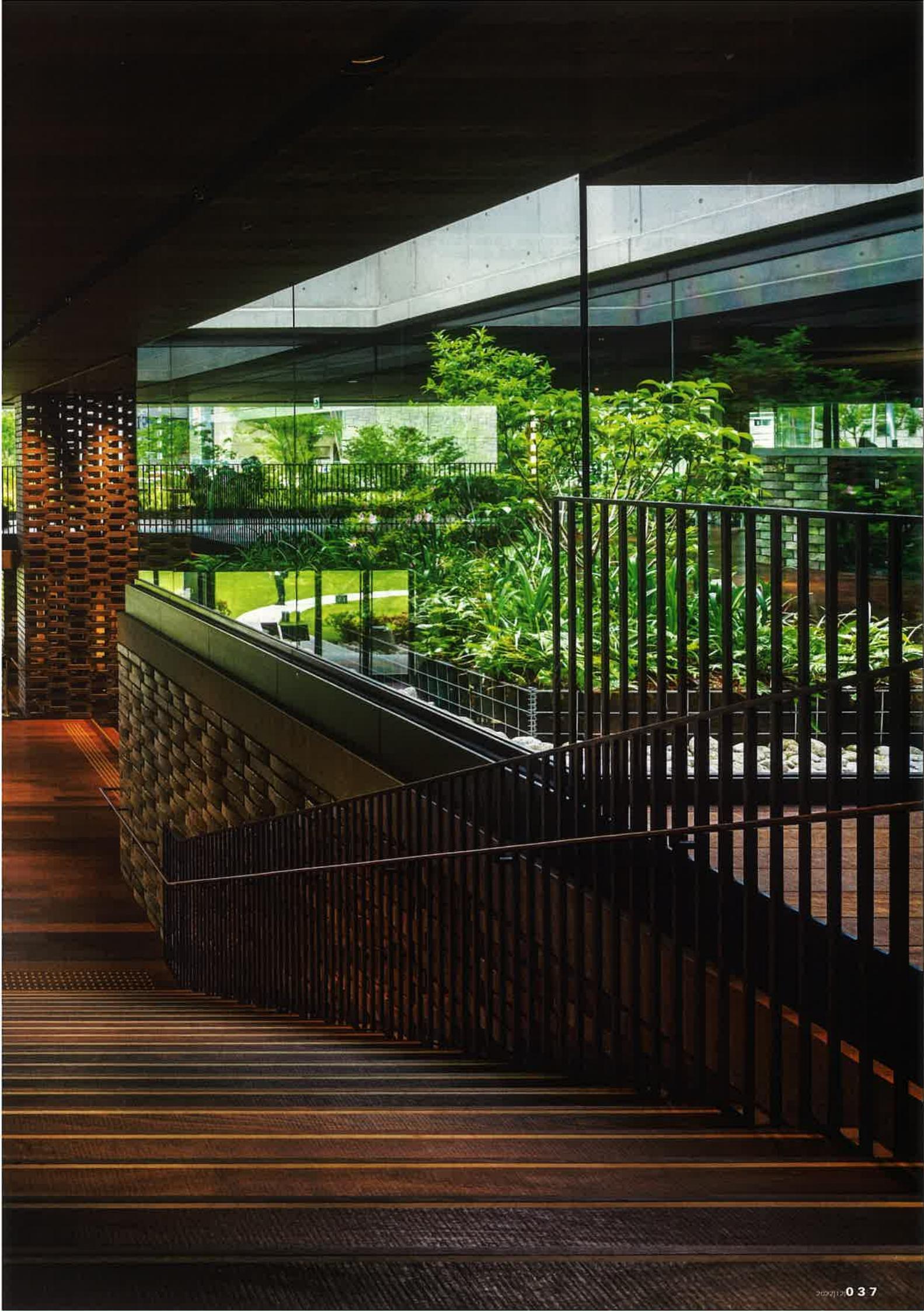
意匠性と機能性を兼ね備えた内外装

内外装で用いた煉瓦は、ホールの音環境として重要な音の拡散・反射を実現するため、釉薬をかけた4種類の断面形状を製作した。重厚感のあるホールと木材・煉瓦を基調としたエントランスにより小さくも上質な空気感を提供し、市民が芸術を十分に楽しめる施設となることを願っている。

(江副敏史+多喜茂+小畠香+芳木達彦／日建設計)



エントランスロビー2階より広場方向を見る。内部にもトップライトや光庭を点在させ、緑と光がレイヤー状に展開しながら外部空間へと連続していく空間とした。X型の歓待柱は透かしやみ煉瓦で包み、空間に奥行きを与えると共に、トップライトからの光によって煉瓦の質感をより際立たせる設えとした。





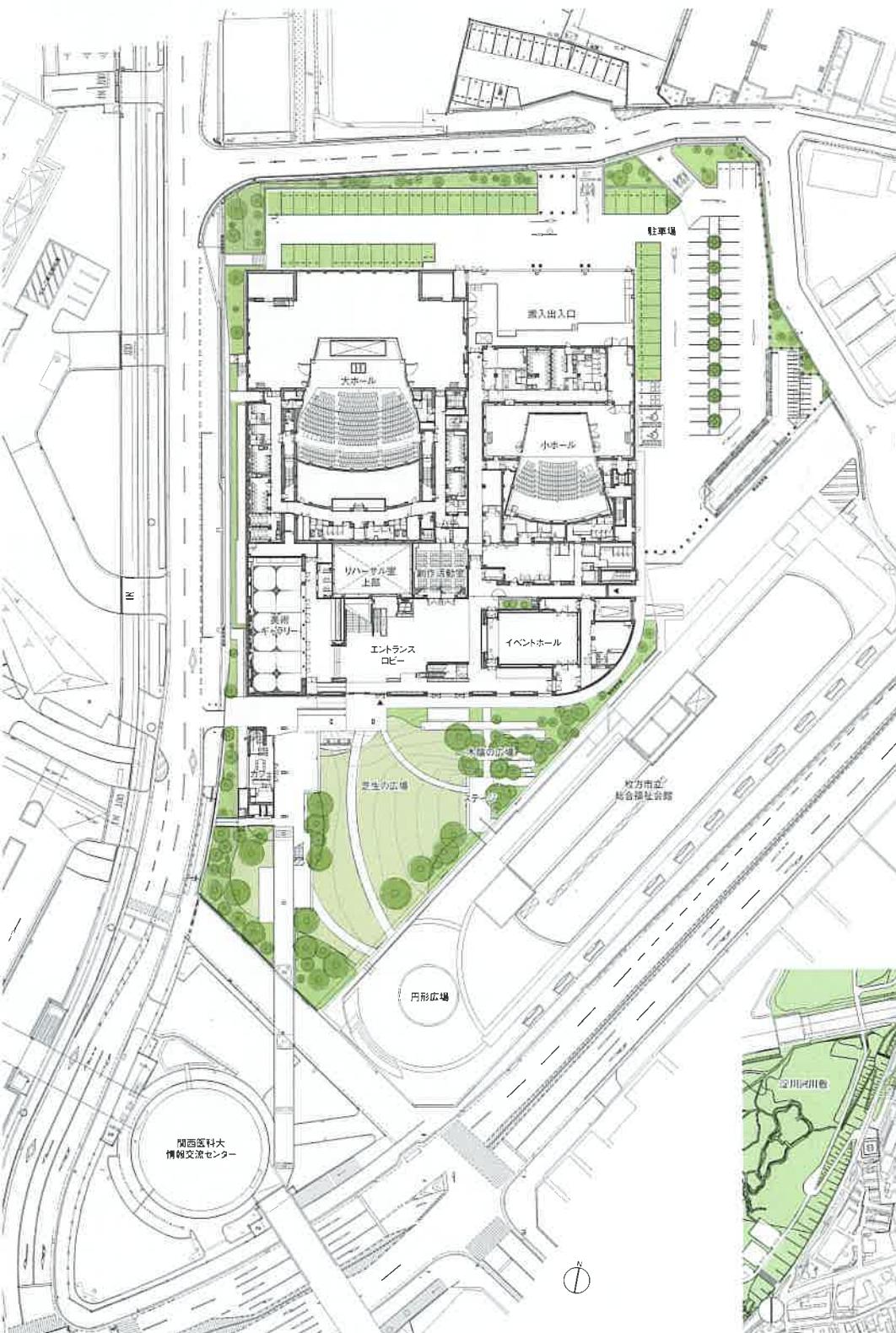
エントランスロビー 2階の天井高は2,400mmで身体的なスケールとした。



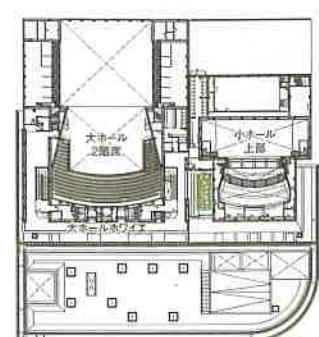
階高3,000mm、2層構成のエントランスロビー。
吹き抜け部の天井高は5,400mm。



軒先緑化に面したエントランスロビー 2階広場側回廊。2辺支持のガラスが連続する。構造壁(右)から軒先までは5,400mm。



1階平面 縮尺1/1,200
大ホール、小ホールの距離が近いため、小ホール周囲にエキスピアンションジョイントと
小ホールの防振遮音構造(6面浮き構造)を採用し、遮音性能を高めた。



3階平面



2階平面 縮尺1/2,000



配置 縮尺1/10,000

エントランスロビー床はスクピラ材無垢フローリング、天井は不燃
スクピラ突板張り。壁面は外壁と同様に祐葉選元焼成大型煉瓦積み。



エントランスロビーより美術ギャラリ一方を見る、エントランスロビーを中心に施設内の主要機能すべてを配置。利用者にとって分かりやすく、賑わいを感じられる空間とした。



→構成の裏とクラブキャンチの組合により
構造柱ごとに5.4m 高さをねじりしている

エントランスコピー側ヒモタイプ(奥それそれから
5.4m在れば)出した断面構成

This architectural cross-section diagram illustrates the building's vertical layout across three levels: Ground Floor (1F), First Floor (2F), and Second Floor (3F). The diagram highlights several key features:

- Entrance Areas:** The ground floor features a double-height entrance lobby (エントランスロビー) with a height of 5.4m, flanked by 3.0m high wings. A 16.2m wide entrance opening leads into the lobby.
- Vertical Circulation:** A central vertical circulation spine connects the floors, featuring a spiral staircase and a lift.
- Interior Spaces:** The first floor includes a 3.0m high room, a 2.4m high room, and a 2.4m high room. The second floor contains a 3.0m high room, a 2.4m high room, and a 2.4m high room. A 5.4m high room is located on the second floor.
- Landscaping:** The diagram shows various green spaces, including a roof garden on the second floor and a landscaped area on the first floor.
- Dimensions:** Key dimensions shown include 5.4m, 16.2m, 3.0m, 2.4m, and 5.4m.

デジタルサイネージ
省エネルギーの仕組み・効果を発信

深い底
直射日光を防ぐ

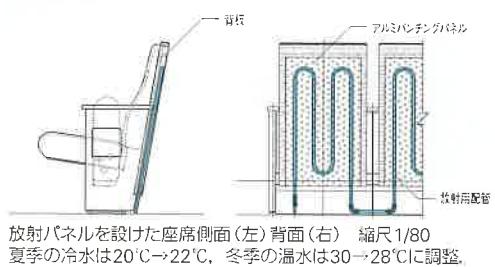
大ホール、平面面共にコンパクトに設え、舞台との距離が近く臨場感を楽しめるホールとした(大阪フィルハーモニー交響楽団特別講演時)。下水処理水の熱を用いて冷水・温水をつくり、座席背面に設けた放射冷暖房に利用している。



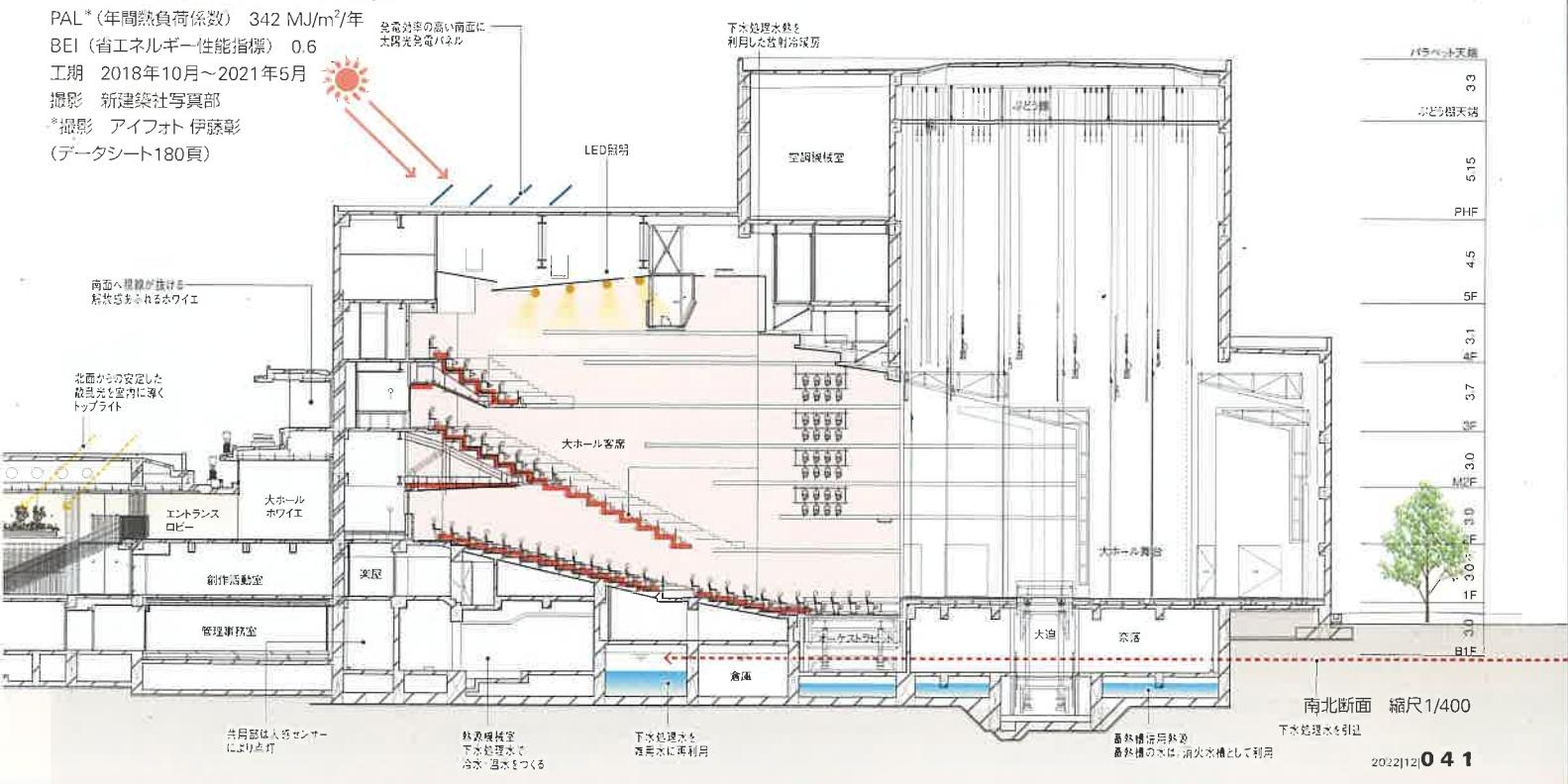
設計 日建設計
施工 建築 前田建設工業
空調・衛生 新菱冷熱工業
電気 栗原工業
敷地面積 13,146.62m²
建築面積 6,906.76m²
延床面積 14,383.75m²
階数 地下1階 地上5階 塔屋1階
構造 鉄筋コンクリート造
一部、鉄筋鉄骨コンクリート造 鉄骨造
PAL*(年間熱負荷係数) 342 MJ/m²/年
BEI(省エネルギー性能指標) 0.6
工期 2018年10月～2021年5月
撮影 新建築社写真部
撮影 アイフォト 伊藤彰
(データシート180頁)

劇場初の放射空調と環境配慮

ホールのような大空間では大量の空気を使って空調を行うため、ドラフトの発生や高低差による温度ムラの対策が求められる。本計画ではホールとして初となる放射空調を採用し、快適な鑑賞環境の実現に取り組んだ。放射パネルは座席の背面と天井高さが低い1階席および2階席後部の天井面に配置している。放射空調でも最低限の外気量をホールに供給する必要があるが、ドラフトを生じないように、人が感じない微風速で吹き出すようにした。(牛尾智秋+副島正成／日建設計)



放射パネルを設けた座席側面(左)背面(右) 縮尺1/80
夏季の冷水は20°C→22°C、冬季の温水は30→28°Cに調整。





煉瓦積みとコンクリートスラブを積層させた大ホール壁面近景。コンクリートスラブは音響の反射に効果的である。煉瓦は4種類の断面形状と七音の反射に寄与する。

人が繋がる場所

江副敏史（日建設計フェロー役員、デザインフェロー）

客席とステージの繋がり

ホールの設計はステージがよく見える、ステージの音がよく聴こえるということが基本で、ホールが完成した時にステージと客席が身近に感じると言つてもらえば成功である。そのためには客席とステージの距離が近いということが第一でそれを優先したコンパクトな客席配置が必要となる。それは奇を衒ったものではなく普通に配置されたもので、結果として自分の席が分かりやすくなり着席する時に迷わなくともすむ。よく聴こえるためには、浮き構造やエキスパンションにより遮音して空間の静けさを確保するところから始まるが、それに加えて客席とステージを親密にして、さらに壁と天井の音の反射形状を検討することで音のエネルギーを失われないようにしたいと考えている。兵庫県立芸術文化センター（本誌0512）では指揮者からこのホールは観客の拍手がよく聴こえると言つていただいた。ステージの音がまんべんなく客席に行き渡るホールは、客席の拍手が逆経路でステージに降り注ぐ。ひとりひとりの観客の拍手がちゃんと演者にも届いているのだ。そう思うと終演後の拍手にも熱がこもる。そしてよく見えるホールはステージに立つと観客全員ひとりひとりの表情が確認できる。客席とステージは深く繋がっている。

小さくつくる

そもそもホールは大きい。その中でできるだけ建築全体をコンパクトに小さくつくる必要があると考えている。これまでの公共ホールでありがちな立派に見せるという考え方ではなく、ヒューマンスケールを採用して建築を小さくつくることで、周辺環境

になじみ溶け込むものにしたいと考えている。それにはホールの機能に必要なボリュームだけを与えて、無駄をそぎ落とした普遍で洗練された建築のかたちを目指したい。1階から2階の階高は3mに低く抑えると空間が凝縮され上下階の移動を促し、交流の密度を高めることができる。

人が多く集まるところ

ホールを人が多く集まる親密度の高い空間とするには、公園や広場からピロティ、エントランスロビー、ホールホワイエと繋がる来館者の経路にカフェやインフォメーション、会議室、練習室などホールに活気を与えるさまざまな要素が絡み合われることで活動が生まれていく。エントランスロビーからはホールのすべての機能とすべての市民の活動が見える。そこではロビーコンサートや壁面を利用した美術展など、いつでもどこでも美術館であり博物館、そして劇場となる。市民ホールは市民が主役なので市民が利用する練習室はもちろん楽屋口も裏口ではなく正面のエントランスロビーから入るべきである。そのことによりロビー空間はさらに賑わいホール全体で市民と演者の交流が生まれる。アプローチ、中庭、それに屋上にも緑を豊かに広げて、トップライトや窓からの自然の光と溢れる緑が煉瓦や木などの素材感と共に建築の隅々にまで沁み渡っていく。ホールに用事がなくても緑の癒しを求めて普通の市民が日常的に訪れ滞在してほしい。人が多く集まるところに、芸術を観る→知る→参加するというサイクルが生まれて、このホールという場所で多くの市民の芸術活動が繋がり成長していくだろう。



日建設計が設計した兵庫県立芸術文化センター大ホール（2,000席）。



豊中市立文化芸術センター（本誌1706、設計：日建設計）。鉄筋コンクリート組積造（RM造）を採用。ホール、展示室、多目的会議室などからなり、市民の文化活動の拠点として設けられた。



枚方市総合文化芸術センター西側外観。



姫路市文化コンベンションセンター アクリエひめじ（本誌44頁）西側外観。



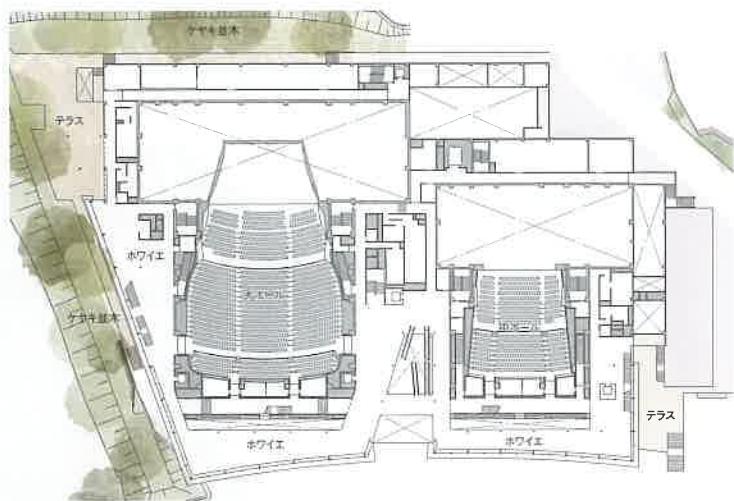
本館外観。久保田城跡の千秋公園間に建つ別館で、秋田県と秋田市が共同で整備した。城跡のまわりは、秋田県立美術館（不法1407）をはじめとした、文化的なエリアを形成している。千秋公園に向かう中土堤通りは、歴史的な工芸と文化的なエリアを結ぶ橋となる。ここに面してひたつホールを配置した。ホールを取り巻く北庭の水平庭からは、木々や並木越しに利用風景が見える階段は、階段のまど周囲と歩道がり合う。北庭の壁は秋田スギ本実型のセメントモルタル仕上げ（162頁、165～167頁キャプション：猪俣也・多々良邦弘／佐藤辰吉写真）

あきた芸術劇場ミルバス

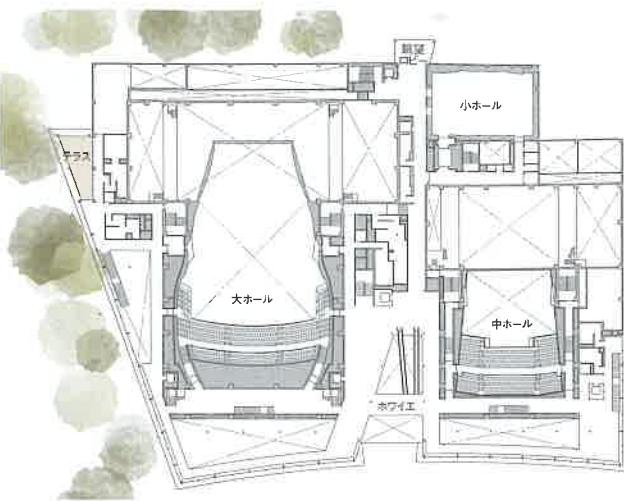
設計 佐藤総合計画・小畠設計共同企業体
施工 竹中工務店・大森建設・シブヤ建設工業・加藤建設特定建設工事共同企業体

所在地：秋田県秋田市
AKITA ARTS THEATRE MILLE HAS
architect: AXS SAWO OBATA

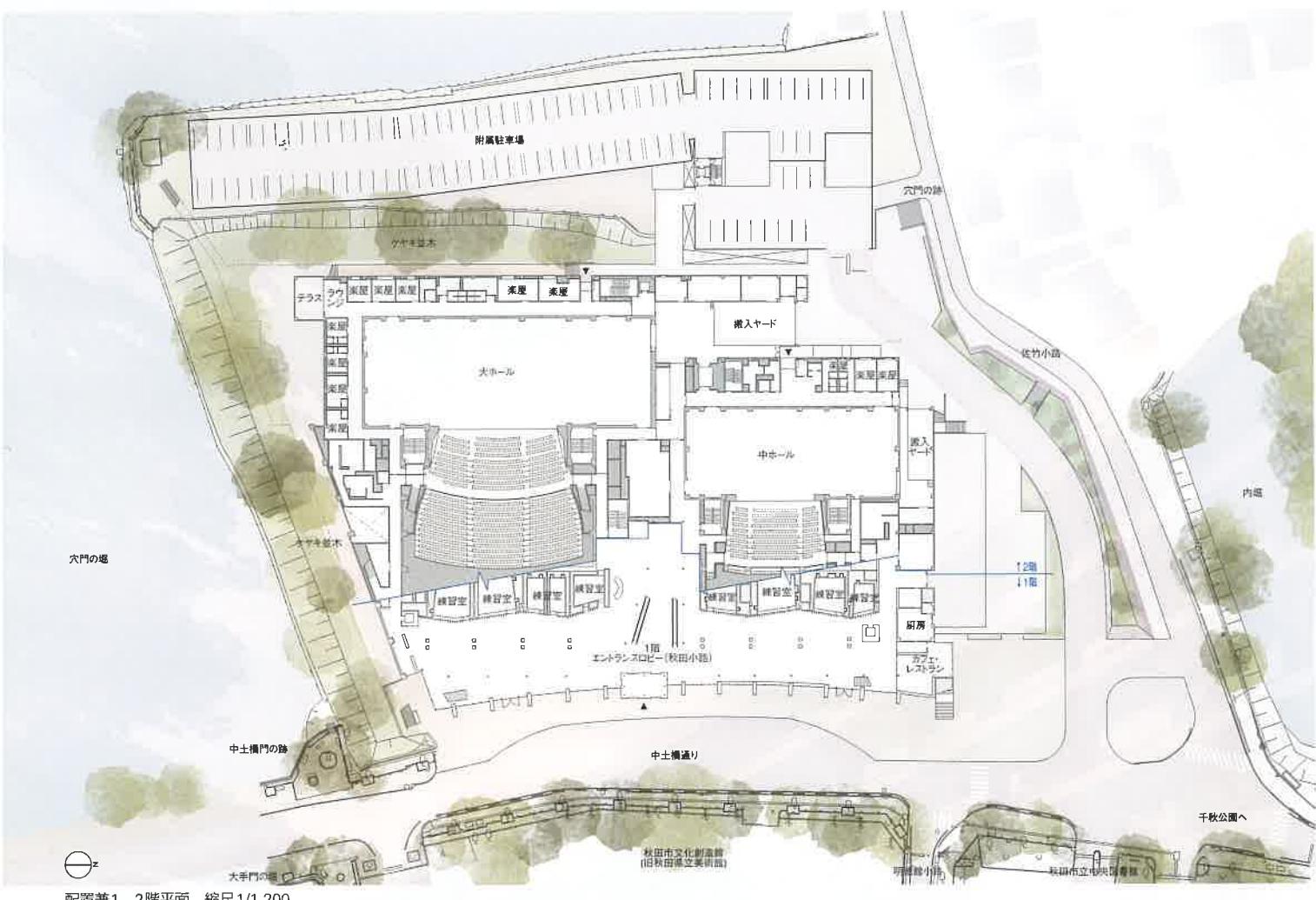




3階平面 縮尺1/1,500



4階平面 縮尺1/1,500



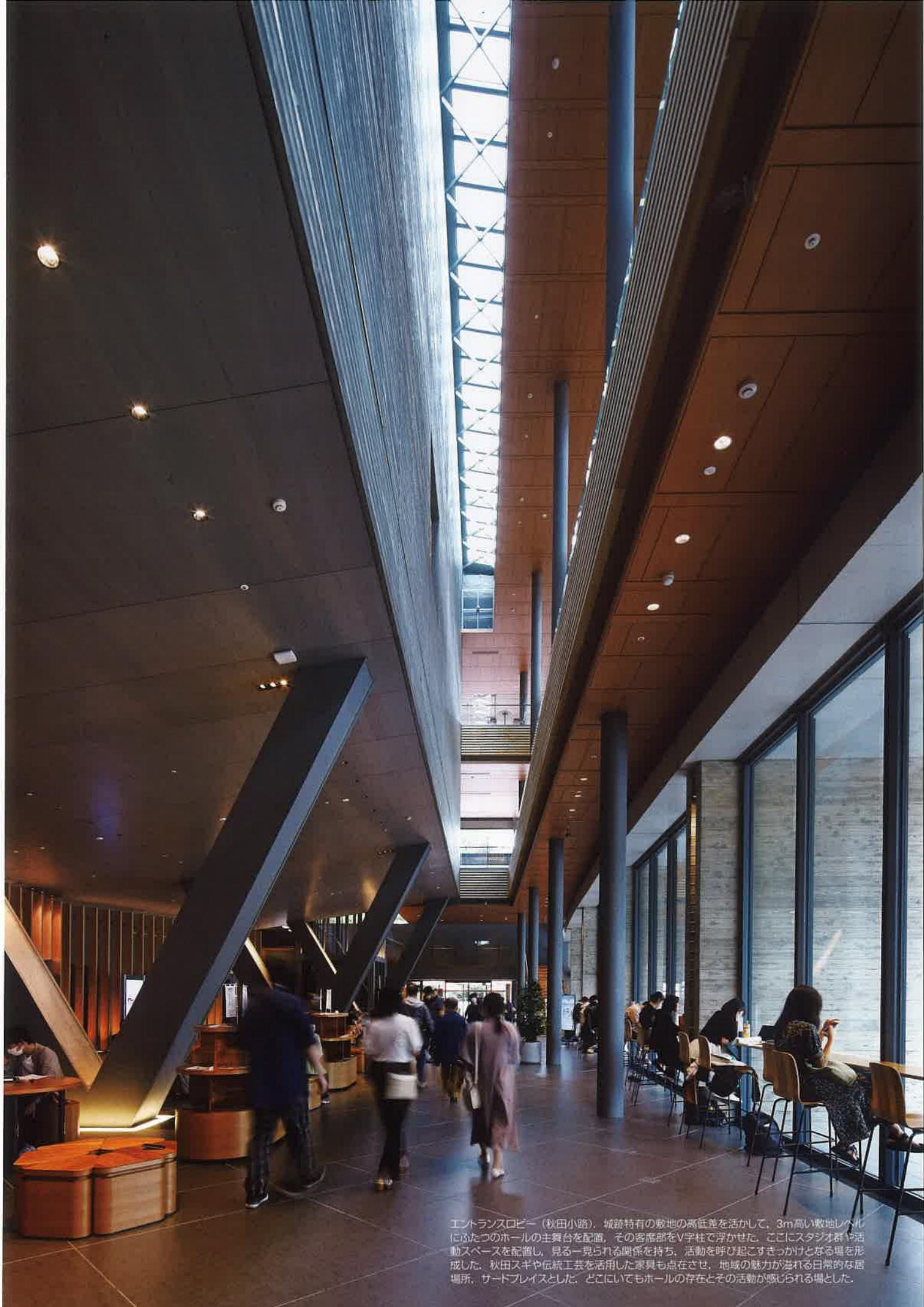
配置兼1、2階平面 縮尺1/1,200



秋田県立美術館(本誌1407)のラウンジより建物全景を見る。右は秋田市文化創造館(旧秋田県立美術館)。^{*}



配置 縮尺1/10,000



エントランスロビー（秋田小路）。城跡特有の敷地の高低差を活かして、3m高い敷地レベルに二つのホールの主舞台を配置。その客席部をV字柱で浮かせた。ここにスタジオ群や活動スペースを配設し、見る一見られる関係を持ち、活動を呼び起すきっかけとなる場を形成した。秋田スギや伝統工芸を活用した家具も点在させ、地域の魅力が溢れる日常的な居場所、サードプレイスとした。どこにいてもホールの存在とその活動を感じられる場とした。

あきた芸術劇場ミルバスの誕生

この劇場は秋田の久保田城跡に建つ。千秋公園に隣接し、外堀に抱きかかえられ、わずかな段差の起伏を利用して自然の景観と地形を巧みに取り入れた平山城の面影を今に残す場所にある。明治期には秋田県公会堂（焼失）、大正期には辰野金吾による秋田県記念館（老朽化によって解体）があった土地であり、現在は、樹齢300年を数えるケヤキの大木が時代の変遷を見続けている。

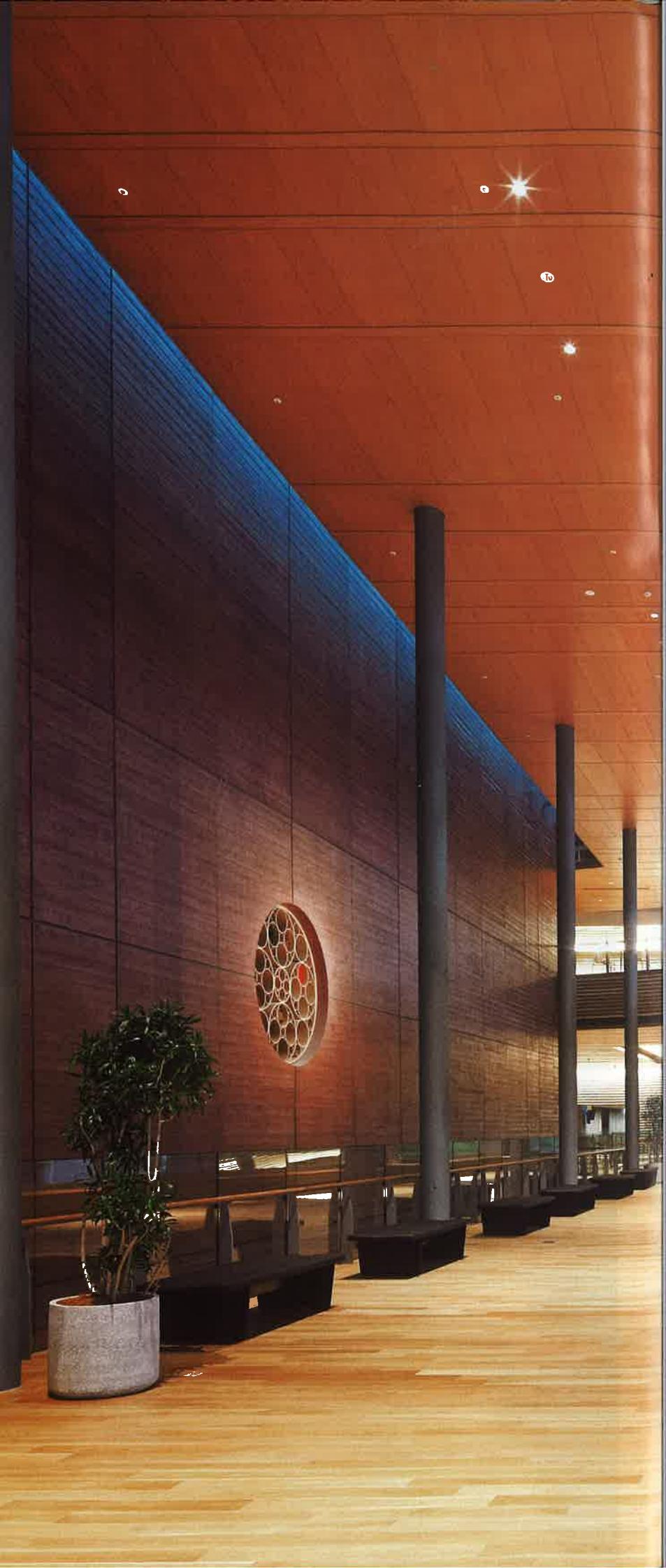
ここに大ホール（2,007席）、中ホール（800席）などからなる文化芸術の拠点をつくるにあたり、歴史的文脈と環境がもたらす建築のかたちはどうあるべきか、これからの劇場はどうあるべきか、それが建築の主題となった。

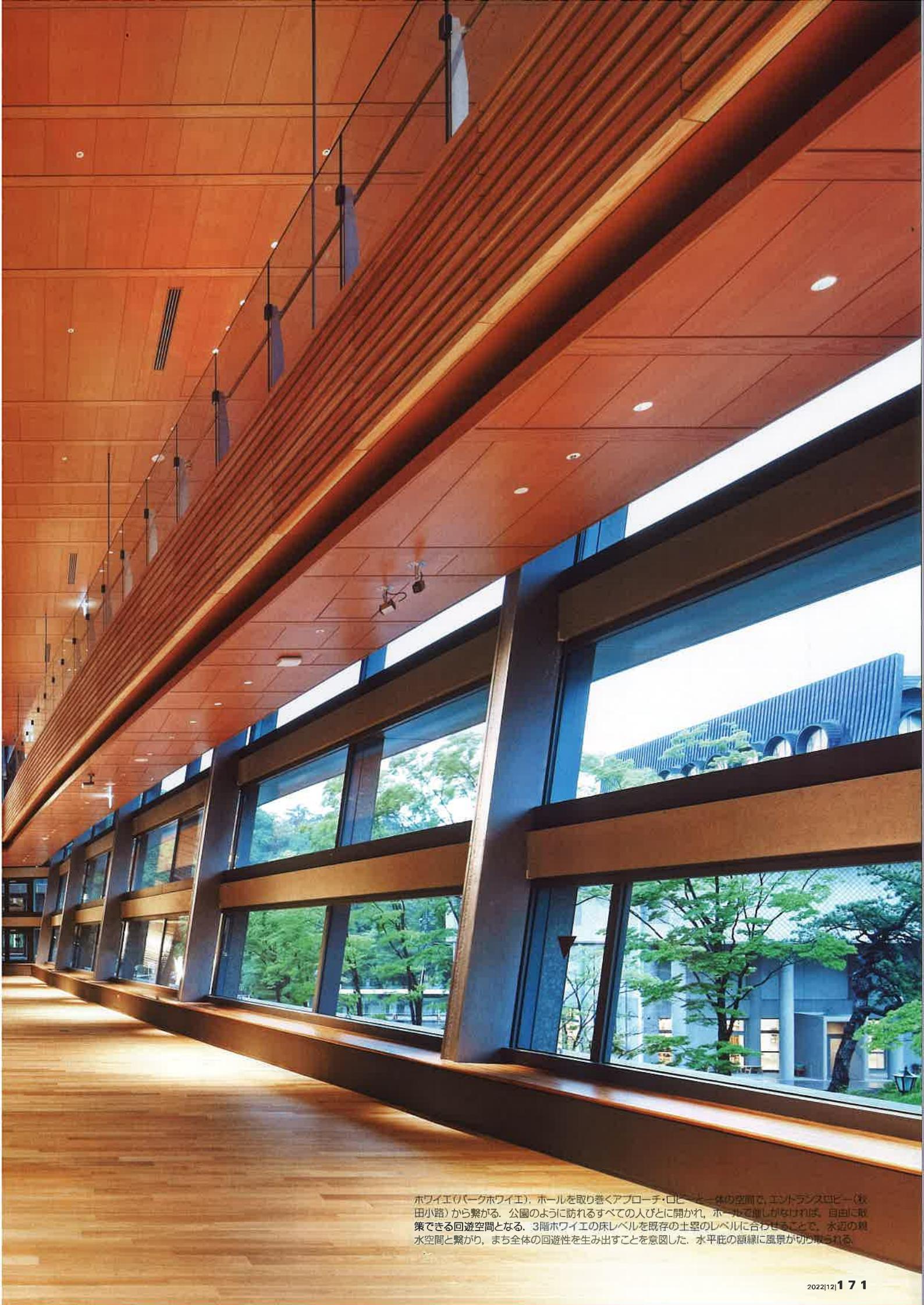
中心から周辺部へと柔らかに開くという考え方、とりわけ注目したいのは、フォーマルな使い方が中心であるホール部分に対して、周辺部は外部に見える堀の水辺や樹木の景観を取り込むように、市民が自由に使えるロビー・ラウンジをぐるりと設けていることだ。大規模なホールと共に、日常的に市民の活動が生起しやすい空間構成になっている。さらにこの建築を特徴付けているのは、コンクリート洗い出しによる重厚感ある水平庇である。ホールの巨大感を和らげ、緑や周辺の景観との調和を生み出すだけではなく、内部からの眺めは、穏やかな水平線によって額縁から覗くように外堀の水面へと広がり、奥行のある豊かさを感じさせる。

あきた芸術劇場ミルバスは、公募型プロポーザル（2017年）で、わたしたちが最優秀者に選ばれ、秋田県と秋田市の文化施設として進められてきた。「場所の持つ形とは何か」それを考えた機能と形態の結実が、その誕生に繋がっている。

（細田雅春／佐藤総合計画）

設計 佐藤総合計画・小畠設計共同企業体
施工 竹中工務店・大森建設・シブヤ建設工業・加藤建設
特定建設工事共同企業体
敷地面積 17,401.55m²
建築面積 10,751.33m²
延床面積 25,057.98m²
階数 地下2階 地上5階
構造 鉄骨鉄筋コンクリート造 一部、鉄骨造 木造
工期 2019年7月～2022年5月
撮影 塩澤裕
*撮影 多々良邦弘／佐藤総合計画
(データシート192頁)

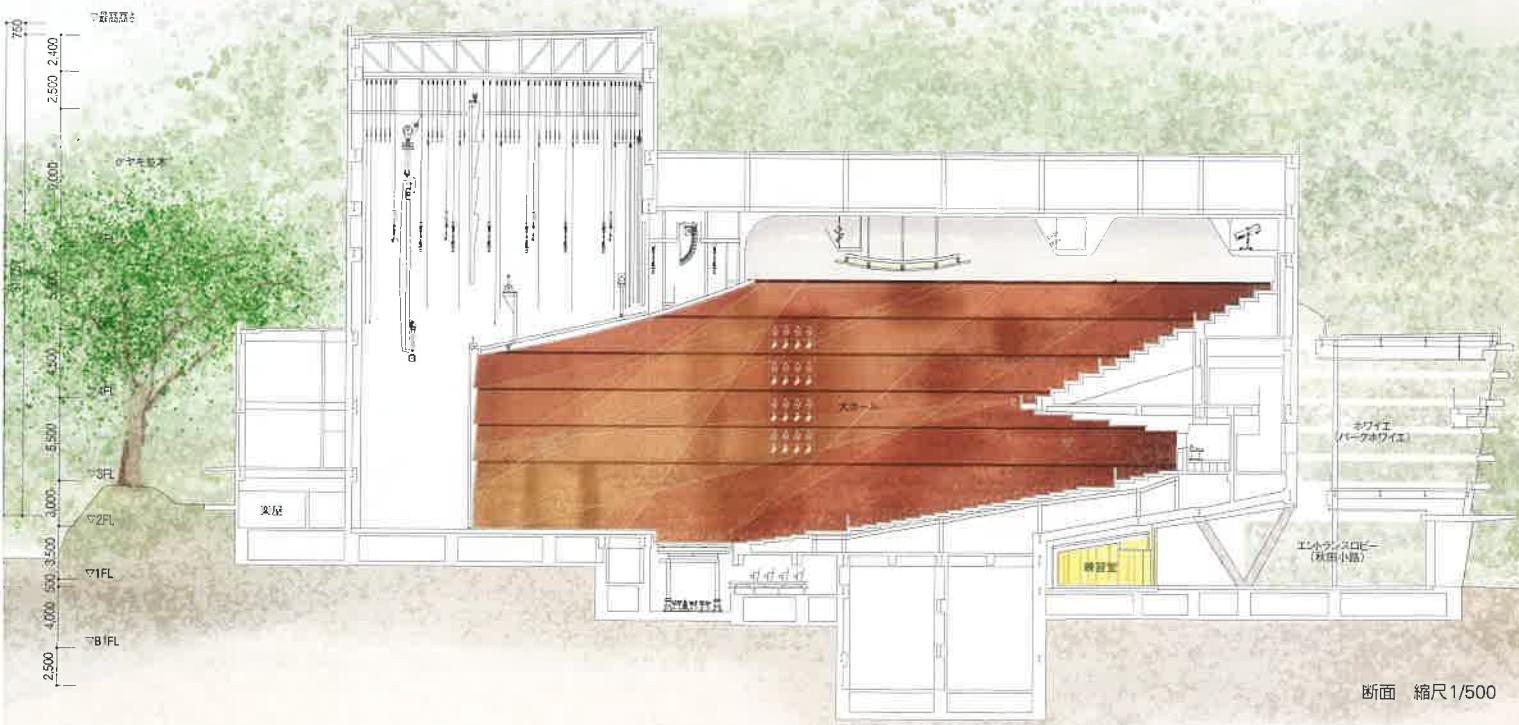




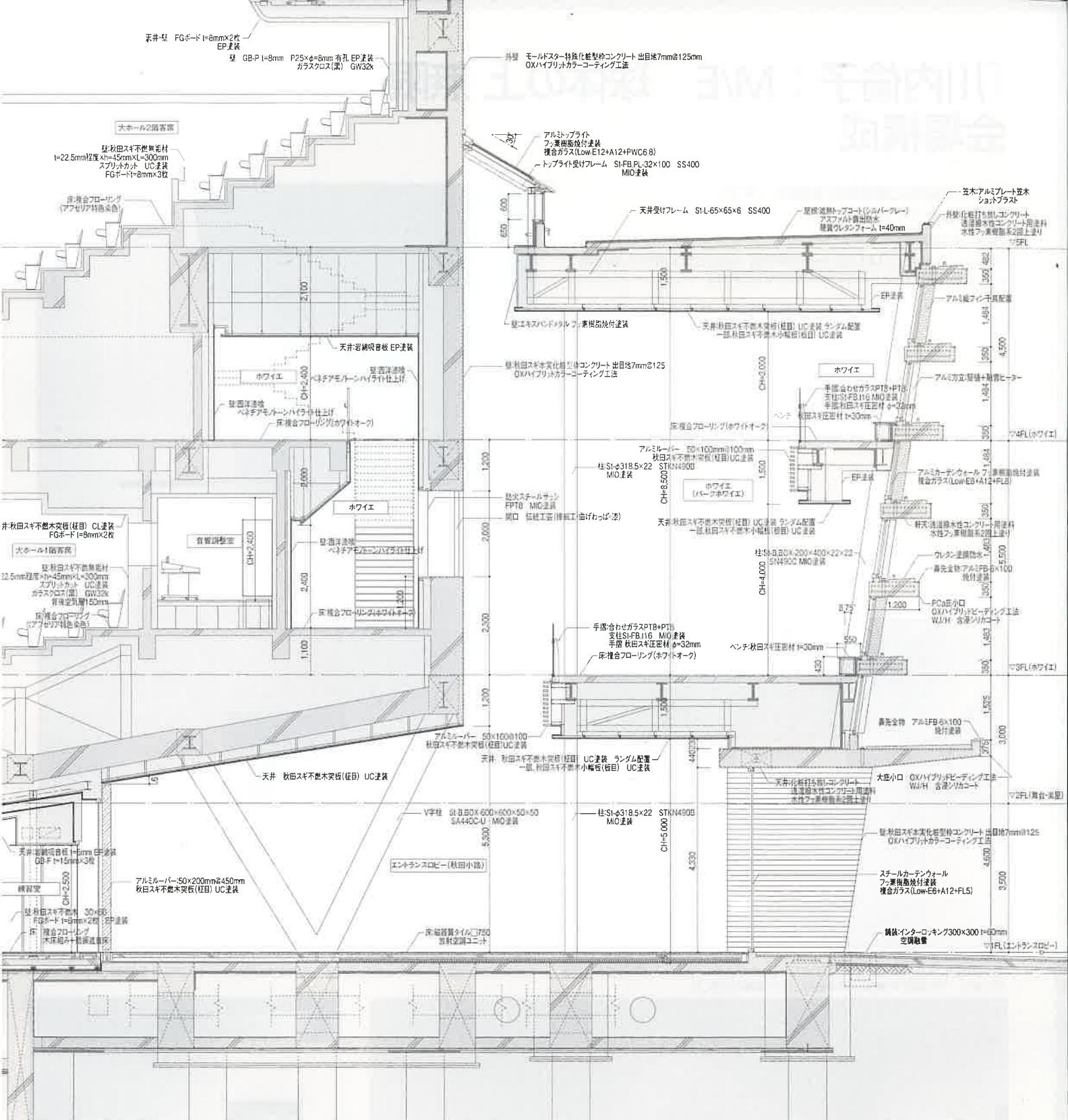
ホワイエ(パークホワイエ)。ホールを取り巻くアプローチ・ロビー一体の空間で、エントランスロビー(秋田小路)から繋がる。公園のように訪れるすべての人びとに開かれ、ホールまで辿りしがなければ、自由に取扱できる回遊空間となる。3階ホワイエの床レベルを既存の土塀のレベルに合わせることで、水辺の親水空間と繋がり、まち全体の回遊性を生み出すことを意図した。水平庇の額縁に風景が切り取られる。



大ホール、天井の浮雲に舞台照明、舞台音響スピーカー、残響可変カーテンを設置し、音響拡散や光演出の役割を持つ。壁面に秋田スギの木煉瓦を使用。



断面 縮尺1/500



断面詳細 縮尺 1/120



エントランスロビー



総合案内、秋田の伝統工芸である桟細工、川連漆器、大館曲げわっぱを組み合わせた。